
ゼロの使い魔～吸血鬼の生きかた～

寒ブリズム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔〜吸血鬼の生きかた〜

【Nコード】

N64300

【作者名】

寒ブリズム

【あらすじ】

「ダングルテールの虐殺」。後にそう伝えられる事件に、血の匂いに誘われて1つの魔が迷い込んだ。

そして虐殺から16年。とある少女と魔が出会ったところから物語りは始まった。

ゼロ魔（タバサの冒険）で出てきた吸血鬼とはかなり違うものとなっています。こちらはかなりの独自解釈・設定が含まれるのでそ

ういづのが嫌な方。そして文章の稚拙さに耐えられないと方は戻るをクリックすることをお勧めします。それでもいい！と言う方はどうぞ！

ブローグ ダンゲルテールの虐殺（前書き）

ご意見・ご感想などよろしくお願いします。

ブローグ ダンゲルテールの虐殺

血飛沫。

炎。

一面を覆う真つ赤な世界。

逃げ惑う人々の悲鳴。

そこは地獄という言葉がぴったりだった。

村を襲ったのは、トリスティン王国魔法研究所実験小隊30余人。
任務は疫病の感染拡大阻止。

方法は全てを焼き尽くす。

それは一方的な虐殺。

抗う力を持たない平民は、魔法と言う圧倒的な力の前に焼かれるしかなかった。

しかし、隊員たちはまだ気が付いていなかった。

血の匂いに誘われた”魔”に今度は自分達が狩られる番であると…。

一般市民を焼き払うという最悪な任務に対して、なんとか割り切っていた隊員はその光景に動きを止めた。

（親子、か…？）

隊員の目線の先には、体を地面に横たえる女性を抱き、その首筋に顔をうずめている少年の姿があった。

（疫病蔓延を防ぐ為とはいえ…、こんな任務はもうごめんだ。）

隊員の目にそれは死んだ母に縋る子に見えたが、その親子すらも彼は焼き払わなければならなかった。

彼は気持ちを必死に割り切りながらも杖を女性と少年へと向けた。

が、そこでようやく様子がおかしいことに気が付いた。

少年がうずめていた顔を上げる。

「ひッ…！？」

顔を上げた少年の口元は血で赤く濡れていた。

おもわず隊員は悲鳴を上げてしまった。その少年が次の獲物を見つけたかのように隊員を見て口を妖しくゆがめたからである。

異様に長い犬歯がその口からちらりと伺える。

生物としての本能として、隊員は逃げなければ殺^やられると感じた。

だが、そう考えたときには既に遅すぎた。

ジャン・コルベールが様子がおかしいと感じたのは、それから少し経った頃。

彼はこの隊の隊長としてこの虐殺を指揮し、なおかつ竜巻のような炎で村を焼き払っていた。

彼は本来優しい人間だ。

だが、疫病の蔓延が生じた場合の被害と比較衡量して村を切り捨てることができる現実主義者でもあった。

おかしいと思ったのはあまりにも制圧完了の報告が遅いからであった。

彼自身この任務を嫌がっていることから、隊員にある程度の葛藤が起こり任務が遅延することも折込^せみではあったが、さすがに時間が掛かりすぎだろうと感じ始めていた。

『な、なんだお前はっ！　く、来るな！！　こっち、ぎゃあああああ
ああー！！』

近くで断末魔があがった。

コルベールの違和感は、確信に変わった。

何かが起こっている。

そう感じたコルベールはすぐに撤退を選択する。

『全員撤退っ！』

そう叫びながら、コルベールは火をかけられた村を駆けている。

1つは撤退を伝える為、1つは確実に疫病の元となる人間を焼き払うため。

村を走るコルベールに未だ無事に残っていた民家が映った。

これだけ火が回っている村の中で、無事である民家は異様に目立っていた。

コルベールはその民家へと駆け寄り、入り口から中を確認しようとする。

だが、コルベールは危険を感じ民家から跳びすさった。

直後、それまでコルベールがいた場所へと、後ろから放たれた火の魔法が殺到した。

「メンヌヴィル、なんの真似だ。」

彼に魔法を放ったのは、本来味方であるはずの副長メンヌヴィルだった。

「さすが隊長だ。なあに、俺は惚れ込んだ隊長の力が本物なのかどうかを試したいんだよ。」

にやりと笑うメンヌヴィルはたった今彼の魔法で火が放たれた民家の前へと悠然と歩き出る。

メンヌヴィルの目には狂気が映っていた。

コルベールは以前からこの副長に対して、人殺しを嗜好するなどの人としての危うさを感じていた。

どこかでこうなる未来を予想していたのだろうか、コルベールは特段驚くこともなく油断なく杖を構える。

だが、そのときたった今メンヌヴィルが火を放った民家の中から女

性の悲鳴が響く。

火が放たれたことに対する悲鳴ではない。

対峙している2人の視線も自然と民家へと向かう。

「あん？　なんだ小僧。」

コルベールの位置からは分らないが、メンヌヴィルが民家の中を見ながら言う。

しかし、その直後10メートルほど離れていたはずのメンヌヴィルはコルベールのすぐ前に転がっていた。

上半身だけで。

「ッ！！？」

「あん？　なんで隊長がこんな近く……に……？」

自分の状態が分かっていないのかメンヌヴィルはそんな事を言う。

身体を2つに分断されてしまった彼は、間もなく息を引き取る。

コルベールは全身から湧き出る嫌な汗を拭おうともせず、さっきまでメンヌヴィルが立っていた場所に視線を移す。

そこには立ったまま噴水のように血を吹き出すメンヌヴィルの下半身と、返り血を浴びて立っている少年の姿があった。

少年は自身の右手に掛かった血をぺろりと舐めとる。

そして、コルベールの方へゆっくりと振り返る。

少年は返り血を浴びていないところなどない、とばかりに真っ赤だった。

そして、彼の目は彼が浴びた鮮血のどれよりも紅く、爛々と不自然に光っているように見えた。

あれはヤバイ。

コルベールは自分の指揮する隊のことも放り出し、震える足を必死に動かしたただひたすらに逃げた。

ダングルテールの虐殺。

後にそう伝えられる1つの村を襲った悲劇は、ひとつの村を焼き滅ぼし並びに王国魔法研究所実験小隊を隊長のみを残し壊滅させた。

- - - 16年後。

『おねえちゃん!! あそこに誰か倒れてるよー!!』

「なに言ってるの、こんな森の中で……って!? 本当じゃない! ちよつとアンタ大丈夫!?」

とある森の中、ボロボロの服を着た少年が発見された。

プロローグ ダンゲルテールの虐殺（後書き）

メヌヌヴィルさんはプロローグで死にましたね…。

というか、登場人物の名前を考えるのが苦手だ…。外人の名前…、全然思いつかない（＾０＾）／

日本名ならまだ思いつきもするんだけどなあ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6430o/>

ゼロの使い魔～吸血鬼の生きかた～

2010年11月1日16時22分発行